

松下幸之助記念志財団 研究助成  
研究報告

(MS Word)

## 【氏名】

許 豆任

## 【所属】(助成決定時)

東京大学大学院学際情報学府

## 【研究題目】

戦後日本の科学教育におけるデューイ教育思想の導入と展開

## 【研究の目的】(400字程度)

本研究は、29世紀日本における科学的思考の変遷を歴史的に検討するものである。科学的思考は、思考判断の合理性や偏りのない中立性のように、先端の科学技術に向き合う市民に求められる資質として位置付けられてきた。科学的思考を市民の資質として位置付けたのは、アメリカの哲学者のジョン・デューイである。デューイは、20世紀初頭のアメリカにおいて、産業化・都市化が進む社会において一般市民が科学的思考を身に着ける必要性を主張した。同じ時期、日本においても科学的思考の涵養を基にした教育が導入されたが、デューイの科学教育が大きな反響を及んだのは、アメリカ占領が終わった1950年代であった。このように、日本において、デューイの教育思想である科学的思考や日常生活の問題解決は、戦前と戦後に二度にわたって導入されてきた。本研究では、戦後日本の政治的・社会的な文脈の中で、デューイの教育思想がどのように受容され、変容していったのかを分析する。日本におけるデューイ式科学教育の展開を明らかにすることで、一般市民の科学研究や科学者に対する認識に関する理解を深めることを目指す。

## 【研究の内容・方法】(800字程度)

本研究では戦後のデューイ思想の導入に焦点を当て、1952年の占領終了後を分析した。当時の日本社会では、アメリカ占領軍の政策に対する反発が強まり、特にデューイ式の生活中心の教育方針は、日本固有の教育観との相違を理由に、多くの批判にさらされた。常生活における科学的思考の訓練は、日本の伝統的な教育観とは異なるとして、科学的知識の重視を主張する声も多かった。

戦後のデューイ思想の展開を分析するための研究手法として、基本的に文献調査に基づいた歴史的分析を行った。教育現場で行われた実践を分析するため、教育雑誌の記事に対する言説分析にとどまらず、当時使われていた教科書、また教育実践者や当事者の回顧録も分析対象に含める。1950年代から1960年代にかけて発行された教員向けの雑誌を主な分析対象とし、占領終了後の10年間におけるデューイ式科学教育の展開を分析した。国会図書館所蔵資料を中心に資料を収集し、旧師範学校が設置された大学のアーカイブの資料分析を行う計画である。

占領終了後のデューイ式科学教育の展開について、戦後の科学教育者たちがデューイ式科学教育にどのような見解を抱いていたかを、戦後爆発的に増加した教育雑誌を対象に調査を行った。デューイ学会誌やデューイ来日記念論文集などの資料を通じて、戦後におけるデューイ教育思想の受容を分析している。戦後直後の記述と2000年代前後の記述との相違点に注目しつつ、日本におけるデューイ思想の特殊性を解明する作業を進めている。

特に、戦後、様々な教育団体が乱立する中、その立場をバランスよく理解するために、教育雑誌を主な研究対象とした。占領期教育改革の背景と担当官僚の教育観を踏まえ、教科書を分析することで、当時の教育実践を具体的に明らかにした。これにより、本研究を通じて、戦後日本における科学的思考の理解と教育方法の変遷を明らかにし、その特徴を解明することを目指す。

【結論・考察】（４００字程度）

本研究は、科学史や科学技術社会論の研究手法を科学教育に適用したものである。科学教育、特に初等・中等教育は、科学論研究の重要な研究対象として十分に分析されてこなかった。この理由は、科学論における主な研究関心が、科学知識が生産される場である実験室や研究者コミュニティなど、専門職としての研究者に置かれてきたからである。しかし、科学教育を科学論の研究対象として扱う研究は、近年欧米で進んでおり、初等・中等レベルの科学教育が一般大衆の科学知識や科学に関するモラルにまで影響を与えることを明らかにしてきた。本研究もこの研究の潮流に沿って、日本における初等・中等教育を対象として、どのような科学内容や科学的方法が教えられたのかを検討するものである。